洪景伯撰
後編

執着譚

2.003
2

特
へ 13
2003
2

太清

浅間嶽面影草紙後帙

二

逢州執着譚　笛卷

種彦著

第二

瞿麦の方深夜に時鳥を殺害ること

男波乃笛鬼火を順て発さる事

夫苦楽得失は惑によつて生じ。生死禍福は天の主によりてふ。敢て言べきにあらず。愚なる眼よりこゝろふかきに幸あるもあり。人乃善悪にもよらざる、似たれど。邪にして楽むは梅の火乃ごく。一旦熾なりとゝ雖ども消ふるがごとく。正しくして苦しむは泥砂に濁水のごし。只式てゝ原乃法さかゝるべきにあらず。さても陸奥牡鹿郡。浅間己ゝ亟が館にあり。何なる者か側室時多を殺害せしとつたへ彼妬婦瞿麦が呼為なり。詳にその縁由を問ゝ己ゝ亟

皇都守護にせむもきそうの所まうる者かけとび瞿麦ゲ根ゲる行跡日頃に添
増花乃晨月の夕いとゝ文字。日夜酒宴遊興に耽り。自ら居高楼に琴
鼓弓の音の絶るときなく。或々仏法にかよりて漫行まゝ〳〵なるに老母霊枝
余徳太とゝる者ゆゑとかゝぞせむ。折ふれ諫めせど。露美人の乱色
ふく妾ひとりの朝臣師長が女ありて。妾あり。夫良治上乃せんかゞ国
ときたにかどりの遊楽いとゞくるしかるべきと侈ふ罵しり。公務ちけし侍女
のゝ傍にせしめ。その余の人にハ絶て對面せもゞ。已隨意遊び狂ひ
視きて者。公ゆるもゆゑきと。什と人何ふるとやつぞるゆゑと。婦に附聽
あつりとふん

○作者種彦伏告

什一條ハ巴〻亟。皇都に世むもきそ〻あくに却く陸奥ゆゑ。舘乃

執筆卷之二

を説のづれハ一ノ巻にてゝる花街乃説話ようハ前ゆ。前後二編と合て
こゆゑとき前編ゆ八回巴〻亟再度皇都に旅ぐろとてゝるに。
什係を次ぐ。因下丹後編後編を除後ハ一ノ巻と続のゝ巴ゆゑと
せいハにゆゑれど。源語に堅行横行あるゆゑど什巻半をそハ時ゆ毎
命のうちゆゑ。夫乃くゝのひ孫
かくて後浅間家乃奶々瞿麦乃方ハ牧山の長福寺ゆりける遠山尼公の墓ミ
訪んとてゝるちいでゆひけるゆ最たるゆゑ物好ものゆゑ性ゆれば侍女半女に
いてるまで花を折紅葉を重〻猗羅ハ散のゝり花ゝ聚るゝゆ粧ひつ。
北上川乃わそうまで練いでぬ。時ハ夏乃ちゆめゆれハあさ緑ゆるその紅
色いとう疲けてうゝるハ乃ゆゑ乃ゆゑ。ちゆゑれていゆゑ桜花ゆゑ
音にゆく時ゆる。ゆゑ十洲三島夢中に在とてゝる。遊仙乃枕に眠ゆち

ふ。眼にふるまどぶ兵衛さまあへふりけり。ム所へ則遠山尼公いまだかりしき
仏まつでの乃乃ゆきぶりに終日桜がり。宿係牡丹花に琴鼓弓を合奏せ
ゆひ。袖の波うにく。相撲が〇〇ちのくの袖のにうの疾川公のうちに流き
てでとも。と詠じてるふるさ名呼ふり。さて瞿麦の方打に皆く逍遥して牧
山乃かさぶまれんとちまつ〇〇さに形宴しき四方髪乃男也て瞿麦の方に告
ぶきことあり。おそれ氣もゆく。なる要に迫づきけまび扈従乃侍さち隅う。
奴くにさこ〇〇きることのべば雑にきう。それくの人にはつくこそ去べれ。
女どき賤〇き所をもて出側にちつぶ曲どふべ。疾さぶれよと息まく
折〇〇。やよ侍ど〇〇さふいひそ。其者に対面もべ〇と宜ふ〇に侍原ら由縁
いち〇〇どとつ〇どよ。畏にと應く。ひこ〇〇う。ときに結ふ乃戸をちづ〇ちにひき
のけさせ。扇さ〇掛頭さち出ゆ〇おん姿のまふぐとほげにく。ひとりも燦うと

おりれ。さぶぐ乃糸のく花やを備ちてるつまふ乃の裾ふまてきてみた。
青南乃香さとあぶれでうつくしくちを笑ひてる面で。眉のかりの数ある人
ばでうう。妻乃仙とりひ〇紀金若百済川成ちうとまう。糖ひをいでる空
ぶん鳴呼おそべ〇かく顔色花乃ぶくにく。却て公の荊棘を隠せり。さて傷
ハ三五人乃侍女を拉〇。其余の従者ハ声乃とぶくまぶに遠ざけ近くきてるべ〇
と彼男をまる行きさのひぬ是何等者ぞと問ふ往年農人奈古平れ方人して
修行者に打扮忘貞寄居虫乃姉妹を惑らせる鈍平太といふ者いく近曽
野夫醫を業とく四方髪ちり。鈍玄と名をとりひ〇ちる愚者ハ鈍玄声を
ひきくふ〇。因外出れ〇まる也。年ふる蟇乃生血にて。調合ふせ〇毒茸ちひ
かけ傍を顧れば瞿麦微笑ちる。ちるきそ従者ハ柔く遠ざけ妾ぶ公の底
をもよくまれる侍女のく側に行れば。めくて帰ちとふれと御ちるに鈍玄も公

やうかくいひけるを秋と中ゝ月日ゝる宴に時を乃方をまねきまひ酒を
命ゝ彼茶を喫ちゝれ験ありく。其夜より悪瘧と変し発熱ふし
よ詳に世ゝ夏ゝ月ゝ賞金を与ゝべき證文までを与へ申ひ者信ゝ
不審ゝ思ゝ回ゝ瞿麦曰妾も疾ゝ病ゝ其ゝ夫公にかりうまで折ゝて
ゝ中ゝ方ゝ手ゝ妻ゝ手ゝ通ゝ乃ゝ方ゝ金ゝ乃ゝ白ゝ色ゝ
より。純玄いとく笑壷にいり彼毒茶を解にハ日ふ三度浄水に刃をうたせ
ゝ武ゝ乃ゝ茶を服ゝるゝ時ゝ頃に疲平愈て原乃姿ゝ変ゝ我家法
乃秘中の秘ゝ秘ゝ紙に写ゝ書ゝ証文にゝ右乃ゝ通ゝ出
尤に賞金をうけ申ゝ方ゝ瞿麦又曰所詮死を待べき時ゝ来ゝ奇病平愈
ゝ書ゝ良ゝ茶乃法ゝ益ゝ〻ゝ〻といへども又自茶用ゝ来ゝ用ゝ来ゝ
汝宴ゝ来ゝ姿ゝ〻ゝ数ゝ乃賞金ゝ与ゝ人ゝ視ゝ〻ゝ〻ゝ従者の居ゝ

方ゝ〻ゝ〻ゝ武方乃ゝ運ゝ疾ゝ〻ゝ往ゝ〻ゝ中ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ答ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ折ゝ〻ゝ瞿麦懐剣ゝ〻ゝ〻ゝ純玄ゝ〻ゝ打ゝ〻ゝ的ゝ〻ゝ
頂ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ一声叫ゝ〻ゝ息ゝ〻ゝ侍女ゝ〻ゝ大ゝ〻ゝ
何乃涙ゝ〻ゝ〻ゝ純玄ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

何といへどさまざまとうるさく時に高き美や小上り一国乃陰火消こと焼めぐり。
瞿麦乃不こりを表出す忽然とこく斑ある犬と化し鬱に沈玄より戻しる
證文瞿麦ら懐中より出ち散さるを呼ふ哇何方ともかく法うせけ。瞿麦のと
ふ〜どうち出ごろきこわふ口惜かの盗去ゆづらげにくちらさごめを縄
ひけんと悔ど甲斐なし。兎角のを間に日入申上刻ばかりとなり。凡ば伴の野
寺乃鐘を暮ちるきに仕日入長福寺ふ法でのうど来に鈴に飯アと又例乃酒
宴を催し侍女どもをあつめ〜歌つ舞つ扇び奥ごのひける。○異入扱ぢ変
又良治ぶ側室時ち入。さら年乃秋瞿麦乃方にまゐられ。月ら延に連てう
さ〜を窃窕ふり〜顔色忽地悪瘡乃〜あに中ぶ〜れ生ずつる片羽と〜ふ蟹
ふるを洒〜花風に嫌うま〜柳江の頼須乃髪いづちにやきくゆきけん徳で
昔乃人とふ乃人ど良治皇都に旅ぶ〜くりふ列敷にひきと竜。蝴蝶舞

振といへ特制乳ふる女幸五両人のく傍にわき他人にハ面をめくせぬるこをさ人
孤ふへど其昔良治が寵愛ふ〜ぞ殊に公ごゑ正しきふ老臣ともく知る
が故にさるぐ〜ふりひ慰め。醫る癒るを〜ましけるぶ〜ふ〜ふ〜ふ
といへども彼悪瘡ハ蟇乃生血をのく〜調ぶ〜る蟾毒のふとこ〜ろにて
風寒暑湿乃外ふれば神丹華陀が術ふ〜ふりゆ〜ぶ。
かくてふ仕今ても何ら〜せんと。半熟死を中ざる愛力をかこち歎のかこ
枝さ〜そ人甲斐ふき変のこひつけ。夢乃中ふり〜夜ふ〜ハ法より外
乃所在りふく。変に始いて私に中ゆ〜ふく。自一旦良治に寵せられ
泉窓に在て〜後羅を才に操ひ。幾国に伏て蘭麝を衣ふ美〜せるく
車ゆるに似つれど。不意奇病に苦〜〜かく〜ぶ〜ふ〜〜顔色〜変ざる
へとぎゆるかこ乃報にやり〜ん情牛天地八万物乃道根光陰八百代の色

客自化生ど〜生はものやわる。錦繡乃荘も冥途の境に益ふく。珠玉の宝
財も閻王乃宮に何ともせんと頻に器杯を飛し。具々念珠を礼操唱名
文に於ては。ちうつ〜より後に蕙園の花と乃て如来妙色身を観
ぶ。紅園の月に臨くに一切法常住を悟り。さあぐ〜ぶ乃ぶく。と
殊勝にも又おれをりけりかくてある夜雨ちまちに降いでければ時を
に敲かさぬくとくとるどおりしけぐ。一人寝りもっぐ。例乃ぐく教珠
つまぐ〜在〜けぐ。程ふれしる楼に。曜麦が枝びとあが〜くて琴の
音乃いと細うきさんけまに流石ふ姫やわりけん耳を欹てつちち涙ぐて
いけるふいつふ蝴蝶よ舞振よ月ど舘にありふが。其方ふ妾に色従
ちちもく。片時乃暇もふく。おれあのぐく拝び奥ぐ糸。余所ふ恋ぶ
さぞ於さるき公に心傾美と申べべと。自ど憂労に此て宜べ。二人乃

女童ふ。ち泣つ。ちふ今めにき所にぞけるぐ。ぐく具々山側をぐ〜ちぐ
仕ま〜ちも。宿世と中ん乃。沢き縁にぞけるべきに。何条る恩を等閑に
申ひ〜ん。かるとに出を旁〜ぐ。ぢん病乃障ふ〜ぐ。吾倍ふ見に作るう。
公渡ぞふ〜ふ公申ぞ。と涙申つ。二人ふ障子の外にもくりいぞ。山入乃草紙の
外読〜〜居りぐ。申さふきふ寝ぎふふきふ〜ひに〜。悪〜ぐちにも眠を
催。其〜音ふ〜打臥ね時に出ぞ吹〜。燈火屢瞬きさ〜〜〜〜かる
乃音さふ寂寞く。不牛枕方を視れば怪〜むべ〜斑ふる老犬臥蔵〜〜
かぐまり居れり。原本時ふふ男子に恥ざる勇ありと〜〜ども病苦いむ弱り
けん。あふ申ぞ〜ろ〜〜衣川被て打臥んとふとを。彼老犬頭ぐきにぞけるぐ礼
申ひ。我ふ君に仇をる者にあ〜ぞ。ヤ〜さえと乃ぐるにより〜ぞ。とふ声
いと〜〜人間に異ふ〜〜ふ。時乃ふ〜ふ公を申さふ。和〜起れをう。眠ぢを教

枕刀ちらつて衣乃間に扨〜隠す。汝獣ガ行くゝふぶ〜文に人殺をとゞ止
むべきの基〜きるゝ。必定浅き由縁あるべいゝとあるゝ疫いゝ世んこゝろいと
宮ゝとき彼老犬潜ぶゝと涙をゝぶし。ゝ不安婆にあり。昔ハ銀玄といゝ醫師ゝり
ゝぶ我家に住る。焙毒あり。酒に和〜く喫ちもれば忽地悪瘡を発〜ゝ瘡藻と
変じ。又彼毒を解もべき製菜二ゝ乃奇法をゝるゝぶ。代変いゝ〜ゝてゝ漏けん
曜麦の方きと〜めゝれ。潜に調合ゝるべ〜と仰をゝ〜もゝ。我食欲ゝゝして何の
思慮ゝく菓子見に加ゝるゝ蕃乃生血と以て。不日に調さ〜あげゝゝ。君彼菓
を服ゝるゝ故に毒の片羽に似る姿とゝり。見悉曜麦が君を妬く
ゝゝより起〜変じゝあれど。其罪人乃原ハそれ〜ゝ。ゝるゝに曜麦の方ゝゝ。
ゝゝゝ〜上ハ賞金をゝるべき證文をゝ〜ゝ。且く音信ハ我訪りゝく。
近曽仏法でゝ乃折をゝゝ北上川ゝく曜麦乃方にあひ〜せ。ゝ〜〜へ

ゝゝゝに。ゝく賞金をゝゝ。ゝりもおゝそ脊中ゝゝ。乃に切て捨られ水乃
あれや墓ゝくゝ黄泉乃鬼ゝゝゝゝ。我泥ゝり謀れるゝれば。人を恨ん
由縁ハゝ〜ざれど。余りには情と扨ひゝる一念又ハ年頃さゝぐ〜の好悪を忘
る報ゝく。忽地畜生道に墮し。善量乃苦辛を受とゝゝも。安婆にあり
ときざゝゝ。愚癡ゝり〜ゝ子盛ゝる凡夫をゝゝく苦〜むゝゝを得ゝべき。
曜麦ゝざゝり〜をゝるゝ〜ゝ。ゝゝ三途乃巷に艱苦徳る間ゝ。代代にかゝ
ゝゝ。焙毒を解を薬方と。賞金を行〜ゝる證文ゝり。彼をゝり〜病氣平
愈の期を催し。臭をゝり〜ゝ證據と。扨ゝと我ゝ讐敵ゝる曜麦を討ゝ。
地獄乃苦患を助てゝ。仇を恩ゝ報をゝけんぞとゝく。悲〜き姿にてゝ人
ゝりゝゝと。浸悔の涙ゝきゝり。嚮にゝり時多ハ黙ゝゝ〜〜ゝ。ゝゝゝる。今ハ
怒ゝふ情ゝ祇ゝゝ。ゝゝ〜ゝゝ。扨ハ我奇病をゝれゝ呼ゝゝ〜〜ゝり

けるゝ五に妬ゝとろ〻。寵を手ふゝゑぐゝく女乃常にゝめんど。毒薬をのゝく顔色を変せゝ也。扨の化権勢をとゝゝんとゝる。武家乃妻にゝ似気ゝく比奥未練の行跡かゝ人に報ゝゝゝゝゝ。今ゝふ扨ゝゝ知ゝゝせんど。我ゝ唯宿世の悪業報きゝく。疥癩とゝゝゝとゝゝゝ。せゝゝて未来ゝ極楽へつゝゝせのゝゝ旦夕ゝ祈ゝゝ仏読ゝる経文つまゝ何ふゝ白露乃玉と嫌く水晶乃珠扨揑切てかゝゝ投ゝて。障子ゝと押ひけゞ月ゝ隈ゝゝゝゝゝゝゝ翠簾かけゝゝゝる桜にゝゝ。ま子女の透影ゝゝゝを小夜風にてゝゝゝる。琴乃音色ゝゝ。修羅の鼓ゝゆゞ。時ゝ信戸ゝゝ。ゝゝ晴腹ゝ。警ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。曜麦ゝゝゝゝゝゝ恨ゝゝゝゝゝ奴原ゝゝゝゝ捺落へつゝゝゝゝゝゝゝ。血筋ゝ真紅乃絢をゝゝ。髪逆まゝゝ立のゝゝ。對標ゝ歯をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

柳亭
種彦伏案

女合法むすびとめのひおどり
辻講美鶯囀反言葉数取
雪居清峯画

ごうぐやきまちぐんむまめこいさ
おかめ京一番娘羽子板
柳川重信画

清川むさうすがたいつき
文七梅桜振袖日記
歌川国丸画

これらがうとりん
是等合巻ごろのつる清半紙之巻も
雪邪一ーりいい求い迄ーさ半ん

鈍玄面生道に墮ー
怨を時るに
うつふ

落選ぶべし。時胡蝶舞振乃両人が次の間にわりく時ありるが目覚てるを知り。何
ぞと立いでゝ見といひとゝ。何氣なき体ゝく其夜は打臥時ありるを知りし
らく。夢は元五臓乃労ひにく信じかゝるとゝ。安にも人おを捨られかくゆ
乃姿ゝりくいつまでか居るべき。若は業毒とゝ。死とも更に恨なし。先服薬
しそ。ふゝんふもじて。即時に醫師に作るく調合ふさしめ庭にはゝ水をひさゝる
掛樋を作らせ。旦夕をそゝぎゝどゝく。德ゝ多に得つる薬法のごく。寒熱ら
さて療養ゆらたゝぶが。奇ゝる哉雪ゝ肌を埋る悪瘡を漸に愈姿の
花ゝ原乃美人のゝるゝ。ゝとゝ。さて曜変の方なゝ乃よゝ代ゆるひゝ孔に落る
きそゝ。時ゝるゝ奇病ゝ墓の生血にく調合ふせて毒薬にゝりくゝ。
ふゝく乃薬にく治ゝべき謂ゝ。殊に掛樋乃水に対をゝゝるゝ。彼鈍

玄ゝひつる処ゝ一点乃障ゝに若彼薬方時ゝるゝ入ゝるゝ。さゝわゝれにに我身の
ゆゝき大変ゝるべ。安閑と見を扶ゝる処ゝよゝわゝゝど。彼書簡をゝく良法に告
ぶゝるゝきゝ寧教害ゝく後雑を除べ。彼ゝゝゝ力量ゝるにゝゝゝ病に労
ゝゝゝれば何程乃とゝゝゝ

てゝ其をゝ〳〵閉〳〵と。是尽きりと已に蘇乃かげふかくろひ脱をのぐ〳〵和ら
障子とゝいきめくれば。夜胡陸ふさと姥麦乳に花〳〵ぐ〳〵〳〵と。風に頃
焼火にわ。めらめら内に爲羽玉乃暗とぞ。ゆるゐ原来時分に侍女〳〵の労を
厭夜に遠く寝こゝ側に。舞振蝴蝶の童乃外人事ふきふ障子ゝ引き
〳〵ぬ。若盛人ぐどの跡をかぐ〳〵に求るいやめ〳〵ぐ〳〵おそるく。うかゞひ
乃る。袖うちかぐ〳〵。傍に女めりまづ乙ゆちわく。誰や毎盃障子ひ〳〵き
故。陸ふ焼火に焦て死ゝ。妾に不意殺生乃罪負せゐるぶ憎さよ。何の為
に其処よ忍びわるぞ。立ゝる処を麝麦ハ韃にて。ゆく抜ゝ。肩先四五
寸切さげゝ。ぬるゐ。ぬけ。ゆきと。ゐれば。尾居ゝ撞と倒ま。敢又ゝ。ちかくるゝ。刃を
恐〳〵。ふにめくるを。卑と。柳宮とつ〳〵。けゝ。ふれ。赤白乃丹尺四方に。散莫
乃手洗の幣帛袋。風ふ。乱ゝふ。勢。舞ゝ。時に。風。あれ。雲散〳〵。山乃端ちく〳〵入

かゝ。月の光に時分。信度ゝ。ぬり。ぬ。月ハ平〳〵。麝麦方ゝ〳〵。ぞや。言ぞ。ぬ。ぬ。
めるゝ。妾も。ぬ。月に年月。待る。恋わり。今見やきゝ。ん明見やらひいぞんと
ぬふ。ふち。却て。ぬ。月妾ゞ。国房に。ぬ。ぬ。きゝ。嫌討に。ふゝ。ふゝ。武士の
室に。似。乳ゝ。最。比。真。る。行跡。ゝ〳〵。ぞや。いゞ。潔〳〵。勝負。ふせ。微笑。てゝち
ふをゝ。起〳〵。たゝ。ぞ。突込。白刃。を。かい。挑り。扱取。かゝ。やめ。ゝ。けん。撲地。と。顛
を。曜。麦。ゝ。ゝ。ぞ。ゝ。ゝ。ゝ

月ハ落れど星乃光にて見視て。こゝ〳〵乃人ぞ。手ひゞ。ぢめにもいとど。痛疾
にや狂アけん時多ハ只退さがらいて。紫夢花乃咲満し泉水を平地とあるゝ人。
片足水にかちつゝ。瞿麦ハよとゝ。ゝ。ゝ。ぬとゝ。ゝ。ゝ。ぬ。ゝ。ゝ。ぬ。ゝ。ゝ。ぬ

切く落し袖ちかざく廊架でゑひに逝さうける扨侍女どもゝ時多の方くへ
させるふぞとく大に奔るき頓て池乃汀ふく蝴蝶ら光嚴につまづきらへふと
くのとゝるゝぞと家隷老臣を與舍庭の隈く残る呼ふく擇りとめうど所多
ど光嚴へ池乃に引ゝれて人丈だかり生のび菖蒲乃ふかうれて頻に見人
ど天明て浸漬く擇いごせゝぶ憐むゝ昨夜流涙ゝ黒髪む池乃玉藻とさだれ
あひ雪厚き雙乃手へ右左に切却とされ。るむつぶせき亡嚴にとり携て侍女
どゝへ悉悲ゝとく泣きふ雪枝小織く助父に對ひ時多の内方へ日頃より侍女と
も寢呼近くへ居ゝめうど我こへふを寄ゝ寄ゝ近寄むでる
ゝんが是へらま言とも詮ゝ何へ兎まれ主君乃寵愛浅かゝぶる側室と人知
らど殺害せゝ仇まゝ此へ捨却きがヒ直病の侍女をとゞめ介明に詮義を
そゝべゝとゝひけきゞ伶也太頭をす否ゝ我ゝふ子細あれば仇一度へ深く秘し。

人に語るゝふれとゝひさとけるに流石ゝ老侍乃ゝゝとゝひ一宮海き調めゝべ
ゝく其意に隨ひ仇と人にゝを者へ曲ゝるべゝと侍女ゝゝふいひきゝ也瞿麦
乃方へんゝ時多へ病ゝゝ死去ぬゝきまへけきゞ瞿麦の方へうち若きー
体に引てゝふけるゝそめゝ雪枝孫ゝ太時多を殺害せゝ罪人を糺さゝ。
瞿麦が呼ゝるゝを推し血で血を洗ふ世乃誹を憚てゝるゝべゝかゝて時多が亡嚴へ
浅間家の菩提所長福寺へ葬ゝ。葬實結信女と法号ゝ。夫大集往こ
若へ仆若へ嘗實ゝるに却ゝゝて則枯又仕螺 異譯 孝環へ奶ゝて身亡と說ゝ。
既に良治四ゝ在ゝ刻ゝ時多へけゝきゞ戒に奇病をうけ
て其ゝゝゝゝ今法号に其意をゝむ。是又奇ゝゝべゝさて時多ゝ非
今に死ゝるゝゝ良治公に告ゝ人と小織ゝ助其役に充らま時ゝゝ位牌を
ゝ我重ゝ乃箱に却ゝゝ既ゝ用意調ひけきゞ又伶也太病めらはきゝ

保養乃ことゝ本国近江よりこゝに越んと。瞿麦乃ものに頭ひ其ことゆるされければ小織の助こゝに連て旅ゝ。往〻〻近江路にとゝりぬ。こゝに浴太ゝひける我も頓て皇都にゝり君乃出家色ゝ〻ゞんぞるわいご浴ハ皆く彼地にとゞまり。君に扈従し。忠義急ゝふれとゞろれぐも教訓し。勢田乃橋よりこゝ離れ小織の助ハ良治ゞ旅館をゝゞて急ぎける

小織のことの良治ゞ旅館にゝりその次良治花街に漫行ゝるゝハ一巻を合ゝて見あらひね

第四

時ゝ乃亡霊種〻の奇怪をあらハ

瞿麦狂死ゝ乃事

瞿麦ハ乃ゝ代に時ゝを弄殺とふし。頃日乃怨一時に晴〻ゝと若ハ詮美ゝの人に扶ゝゞきゝゝふゝて〻合説と安き乃ゝあ〻ゝゞりゞ。唯病車て時ゝを一死去ぬとひゝ。絶〻其沙汰に扶ゝゞど扶ハ我呼ゝと知者ゝ〻を

扶ゝ安堵乃ゝひを。夏ゝゝ〻ゝ色ゝ扶ゝ半に〻ゝね望乃夜ハ例のごく。月ゝゝ宴をゝ月ゝゝゝゝゝ人扶〻ゝゝゝゝゝ。殊に其夜ハ天ゝ一点乃雲ゝ。月ゝのごゝゝ登りけれハ瞿麦晴乃方に端居して酒宴を催し。詩を賦〻ゝを詠。夜ゝ〻〻深酒ゝゝゝ〻ゝ〻ゝ扶ゝ琴を調ゝ。ゝゝ〻ゝ〻ゝけるハ君去年乃今月ハ時ゝを弄殺に扶ゝ扶ゝ琴を調ゝ。ゝゝ〻ゝ〻ゝ吾們ゝ集会ゝゝゝゝゝ〻ゝ〻ゝ〻

蕭然袂より水を滴たらしめ己が涙をかこつそ情らしきさまをつひ生ーと
つ面ゝ多を。瞿麦を怪しく知りしとさとのゝ風情にて微笑つ彼ふきぶり
ハ外らぬごとく妾ハ何をか乃代に琴ゝ面調べ。誰指とゝと琴ゝ二面をとりゐ
さセの人ハ昔を時をを縦ゝし松風し清乃手ゝ。以上二ツと琴の名琴も妾こに今青頃
ゝ。ゝ二面をとりゐゝどーハ。ゝとゝ二ゝどおりゝど。往さゝ今。親に撫ゝとる萩乃香
ひて指ゝちゝゝ。琴ゝかゝゝゝをハ徒て音ハいで。ゝゝどゝゝ不思議ゝとり。
琴をとり琴。又一面を調ゝとゝ只撥を打ゝゝ。多ゝゝ僅乃声も多くて。何地ゝ
ゝゝゝゝゝと打笑ひ怨ふゝ其琴ゝにゝり。糸を妾ゝ撫ゝゝ居ハ。眼に見え
ゝゝゝゝゝ程汝ゝ妙ゝを音乃ゝゝを。ゝ音乃ゝゝゝ謂ゝ。障ゝ疾ひけゝる愚ゝ。
去ゝ乃袂法ゝ妾ハ投ゝゝ乃ゝ。ゝ辛ゝゝゝゝゝ

二面乃琴。古尼に物そ撲地と倒れさゝぐ〳〵乃手をかけ〳〵枝がゞに流石大
膳のる曜麦もわまり乃ふ魂きえて言へきことをゝ〳〵侍女乃ふさ〳〵ふ
生さる。ゆ行ふく。南无仏〳〵と唱へゐどゝて。既に奥おとゝきわければ今月乃
酒宴いよ〳〵かぎりそゝ。曜麦も座を立めぐり。戦居る侍女を言てけまゝ。
件乃琴をとりかゝげんとみるに恰も両と洒〳〵。おそるゝ〳〵燈火てら
し見るに血に染し千乃形糸の間よ印し。水に散る〳〵紅葉を畫に似ゝり
わるやとゆひてうち見で又りやく〳〵と打笑ひ。こゝ〳〵今に物ひきさんと。
声ハ耳乃もとに鄙姿ハ夫に〳〵まるゝ〳〵ぞ。三園乃陰火机帳乃かげゝり怪
そで雲井遥に起さうけるゝ。さて次乃夜ハるさ〳〵〳〵降けさ〳〵又いろなる
怪支やあ〳〵んと。侍女どもハ仏も又に乞る〳〵ぞ。曜麦し〳〵く言ふ〳〵
徒然を慰んと十炷香を催し。拍びに嬢つ。怖〳〵と物ふも少〳〵うちつれ

けるに障子さゝ〳〵とひ〳〵くを。誰こそふや〳〵と顧れど見て〳〵へもめ〳〵どいつ
乃ふやん侍女にうち交二人乃女童ゆり。妾をもたびがゝきに去るへとて。
再ゝ去るき熟〳〵れハ侍ゝるゝ共ふ世を夫に胡蝶舞振乃両人ゆり。侍女ハ一塊と
ゆり。油うちかゞ〳〵て〳〵れ舞る者ゆり。時に時多るの者宅上にめり。ゆ胡蝶
よ舞振し。香さて拍ゝり。ゆ棟木を疾きるべ。曜麦初侍女乃の棟木
に〳〵れてゆ〳〵ち苦しもを〳〵れに〳〵十炷香ひ〳〵くるゝ時ゝ〳〵めるべ〳〵と
い〳〵て。恋と舞〳〵立めぐ〳〵んと〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。曜麦懐又抜さゝ〳〵ゝ〳〵
切〳〵ゝ昌さ西両ゝ鬼火〳〵ゝ。菊をゝぐ〳〵ゝ〳〵ゝ。ゆ怪をさて人
人ハ天に奏き迎ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。三人乃亡矣又宅上に
ゝ〳〵ゝ。其就を書よ氏を切〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。物ゝ在し昔乃声に似ゝ
頻て銀乃音さゝ〳〵ゝ。声に順て屑ゝ人班〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

とぞ。或は観世音乃手行を唱るなり。或は字を額にかくなれど。
なる邪ふる者どもふつゝ。神仏乃冥助のゝ。遂に棟木自焼山明拉ぬ
と答て瞿麦ゞ脇の前に落けるに侍女共は棟木に打れ呵つゝ喚んぐ
息絶にけりぬ。此夜遠くきゝつゝ。何ぞやと。炬火を照して出来る人
あり。侍女とも漸く正気つきて。わなゝくれが崩れ出し棟木ゆゑ又宅上に
かやくと笑ふ声横堀に響て答てあるとい。ゞ又ふり。表角ゆゑ百に夜ふ
ふれけるに。總て舘に崩れしところ。さて次乃夜を反ゆゑ
月らしう清けりけれど。夜毎乃怪ゞ物怕。何人かつてゆゑ物ある者をゆゑ
部されこめをりをいそめくわうしゞ夜半ふりに人乃来るけうひしく
今四人何ゝく拉ぬとゝ。頃日瞿麦が碓をうろ。侍女ふうをて屋心ゞ
其後幸に此妙ふりぬ。ゞ見をうらく眠を覚べゝと庭さきらて拍子也

くうつとこゝけれぬ。おまを歩者共に推ゆゝぐ拾ふうさ
歌くに人ゆて只花乃おつゝ消て声あるのゞ此花に亡霊ゆらく笑
ゞ。昨夜棟木乃崩れしゝ。ゆゝ人おてら。さを劣て眠を催ゆ者ゆゆる
ゞ。怨此瞿麦ゞ臥くる屋風乃うち此車の輾る声ゆくくるく美しく粧ひ
くる五衣乃車人ゆゆゝで物いで直宅侍女乃前を袴ゆにいきとらしべ。
大に怒ゞ屋風ゝのけ瞿麦をくるに首ふき褥ゞ打臥しうゝ変化
乃に首をとりて往つるゆゝ。老臣ゆかくゝきさゝ人べ吾们が局度ゆゝ。
ゝふゝてゝ分説とゆゝ。さも衣に乃車を伝見べゝゆゝと笑ふ声して
ゆくゆゝ消うせけゝ。時に瞿麦に吻と土息て起ふゝりゆるゆゝて
呵ゝゞ亡夫我前をゆるゝと夢ゝゝ。物語りゆゝを再度ゆゝ。
ゝれべに首に原乃まにゝ。ゆくて異ゝゝ。さてに車乃往つる夢ゝや

あるこゝろと却りて〻ど轍々さゞめく畳に結りゆ。畳又奇怪とうべくして次第
夜へ風烈しく雲かゝりて月さへいでゞ。庭に蛩乃音のまこゝろと昨夜似
ゝ。或ハ近く或ハ遠くかゞくと打笑へ声きすゝ家ゆるゝとかゞ〻し既よ
夜ハ更ふけて風ハ林を倒さんばかり。庭にさへ池水より鬼火ゆらゆらと村雨が
姿彷彿と現いでゝ。中ゝ雲を踏て逆とゝ。御こに瞿麦が国字に近ばけむ
侍女どもハ恐やとゝひて打臥五舞宿を立とゆゝ頃で時分ハ瞿麦が黒
髪をよにかゝえうゝ打ひいゝふぞといひつゝ。ひきゝそんとゝゆゝ瞿麦が生
ゝる花りもて。ゆゝ枕辺乃刀ぬき打切ゝ〻ど亡霊ハ懼てゝゝ。
ゆゝと笑ひ地水に溺を両手をきり落されつゝ比ゆゝ。ゝふ嘖とも物
ゝど〻ゝ。ゝ。ゝ。

命を易に迫りしとき。言べきことありそて枕辺に家隷をよび集め。まづ西こと
涙を流。涙をはらひ夫と乞ひ給へ。氏瞿麦を苦しむ。則我妻なり。と
いへ声の時多るに異なるを。時ありて又曰。妾ゞ乃賊きを知り。さもなくに
嘲哢し。剣玄と申しいへ医師をかくしひ毒薬をもつて妾と太風と。
相公乃寵をねたんとありしを。剣玄ゞ幽魂の告によりて詳に知りぬ。
ゆゑの業を服し。少しく病ありしかども。時ゆゑ瞿麦をもつて深夜我
国にゆびきをう。賊ゞ乃所為なるべし。瞿麦ゞ
妾を仮時多るゞ乃ゆへ人を。ゆゑとまろうまを。告ありしもなく今の
いつふをしいひ又ある苦しと異ゑ。瞿麦ゞ声多。こもく今ふをひ知さん
ゞるへと。庭さきふ立まるを。人ゞ周章ゆゑとゞしゞ右左に突退ゞを狂
ひ狂て走りゆき。池乃汀に立ゞ。婦人をさゝまねき。又時多ゞ声して妾

を殺害せしゆゑ。ゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。ゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。
ゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。我とゞ尤の手を徹しそして。
潰てゆる苦しゆるゞ。今乃ゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。
といひて池水に落り。狂ひ死ゆゑ亡ゆゑけり。嗚呼因果覿面乃理あれを
ゆゑの豆恐れ慎まざるべんや。又瞿麦ゞ従ひ時多るを嘲せし邪ゆる侍女ゞを
ゆへ乃禄ゆゑにくしとゞ入るとまろ。衆に痛或ゆ蹇しゆゑ或ゆ短項とゆる。
ゆゑ悪報によりて半ゆゑ乃片羽とゞゆゑりけるゞ。ゆゑ乃野の庄にて。
夫に人ゆゑ野辺に砕乃ゆゑをきゞゆゑめあり。夫人異ゑを幻碓しいへり。又砕
を夜戸外に出ゆゑ時として声ありとて。黄昏にゆゑゞゆゑりゞゆゑを
ゆゑんゆゑ時多るゞ怨鬼きゆゑゞゆゑ。又狐狸乃ゆゑ乃ゆへ人をとりこめ
ゞゆゑりゞゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。ゆゑゞゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。
ゞゆゑりゞゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。ゆゑゞゆゑ乃ゆへ人をとりこめ。

のを彼地にハのとれりとゝ。ある翁乃かたらひ

浅間嶽後快逢州執岩譚二之巻終

山青堂